

入鹿小だより

熊野市立入鹿小学校
校長 樋口 佳洋
平成 29 年 12 月 11 日
第 18 号

がんばって走ったよ！

いよいよ冬の訪れが本格化する12月6日（水曜日）、毎年恒例のマラソン大会を行いました。学校を出発し大栗須方面への折り返しコースです。1年生は1km、2年生は1.5km、3年生以上は2kmとそれぞれの体力に合わせてコースを設定する中で、1年生や距離が伸びた学年は、まずは途中歩くことなく完走することを目標に、それ以外の学年は過去の昨年の記録を上回るタイムを目標として設定し、それぞれ自己と戦いました。

大会に向けて体育の時間はもちろんのこと、朝や休み時間に自分たちで時間を見つけては運動場を走り、練習を繰り返してきました。初めのうちは体が重かった子ども、練習するうちに体も慣れ、足取りも軽くなってきました

途中で一度も歩かなかったり、目標タイムを大幅に上回った子どもいたりして、みんなの頑張った結果を形で表すことができました。なお、当日は紀宝警察署の方や紀和駐在の大谷さん、保護者の方にもご協力をいただき、安全に走ることができました。ご協力いただいた皆様、そして沿線で応援していただいた皆様、本当にありがとうございました。感謝いたします。



授業参観・学級懇談会 ありがとうございました

授業参観と学級懇談会にはたくさんの保護者の皆様にお越しいただき、ありがとうございました。当日はお子さんの授業の様子を見ていただき、いかがでしたでしょうか。全てのクラスで複式授業をするようになって今年で3年目を迎えます。昨年度までの2年間は市の学力向上事業の指定を受け、特に複式授業における工夫を研究してきました。その成果を受け、今年度は更なる充実に向けた研修に取り組んでおります。職員は子どもたちに少しでもわかりやすく教えるための工夫をしているつもりではありますが、自分たちでは気づかないことがあるかもしれません。何かお気づきの点がございましたら、何なりと学校へ連絡をいただければ幸いです。



我が家のポルトガル語事情 その1

私がマナウスに赴任したとき、娘は日本でいう幼稚園の年長組になるときでした。小学校入学まであと1年あるので現地の幼稚園に入園させることにしました。現地とはいえ、そこは日本人の牧師さんが園長を務めるプロテスタント教会が運営する幼稚園です。我が家はキリスト教を信仰しているわけではありませんが、送迎の関係や歴代の派遣教員の子どもはそこに通っていたということもあり、入園させました。

園長先生夫妻は日本人なのでもちろん日本語を話せますが、クラスの先生方は皆ブラジル人、クラスの友だちも日系3世か4世の子はいるものの日本語はあまり通じず、いきなりポルトガル語の中での生活となりました。案の定、最初の1か月近くは行くのを渋ったり、行っても園長先生の奥さんのところで泣いていたり、何を言っているのかわからない環境の中、大変な思いをさせてしまったようです。

ところが、1か月近くもするとみんなの言っていることがだんだん理解できるようになってきたのか行き渋ることもなくなりました。それどころか、「朝、出席を取るとき、他の子が『プレゼンチ』と言っとるから、それが『はい』のことなんやよ。」と私たちに自慢げに説明するようになってきました。また、ある日突然、夕食の前に何やらお祈りのようなものを言い始めました。妻と二人で「それ何？」と尋ねると、「いつも給食の前にみんなで言っとるよ」と平気な顔で答えました。教会の幼稚園ですから、昼食の「いただきます」の前に神様へのお祈りがあるのですね。それも結構長い文章なので意味は多分わかっていなかったと思います。これらはすべて耳から聞いて覚えていったものなのでしょうね。このとき、子どもの可能性や柔軟性について再認識させられました。

実は、赴任先が決まってから赴任までの3か月間、伊勢の英会話教室のポルトガル語コースに3人で通っていました。少しでも現地の言葉がわかればと思い通い始めたのですが、このとき娘は保育園が終わった後の時間だったこともあり、うとうとしながらレッスンを受けていることが多くありました。ところが、先生の質問に私と妻がどう答えていいのやら顔を見合わせていると、うとうとしていた娘がむくっと起き上がり、正確に答えていたということがありました。うとうとしながらも子どもの耳でしっかりと聞き取りながら、きちんと理解できていたのですね。学校でALTがしゃべる英語を小学生の耳がしっかりと聞き取ることの大切さは、このあたりの理由からなのでしょうね。

このような環境で1年を過ごしたので、卒園する頃には我が家の誰よりもポルトガル語を理解できるようになっていました。「言葉を覚えるには現地に生活するのが一番」とよくいわれますが、これは半分正解ですが半分は正解ではありません。たとえ現地で生活しても、日本人学校の中のように生活のほとんどが日本語という場合は、言葉をなかなか覚えることができません。「現地で生活し、しかも言葉を使う必要に迫られる」が正解だと思います。【次回へ続く】